

リンゴ「おい、書け」

まとめ市況が褒められた件

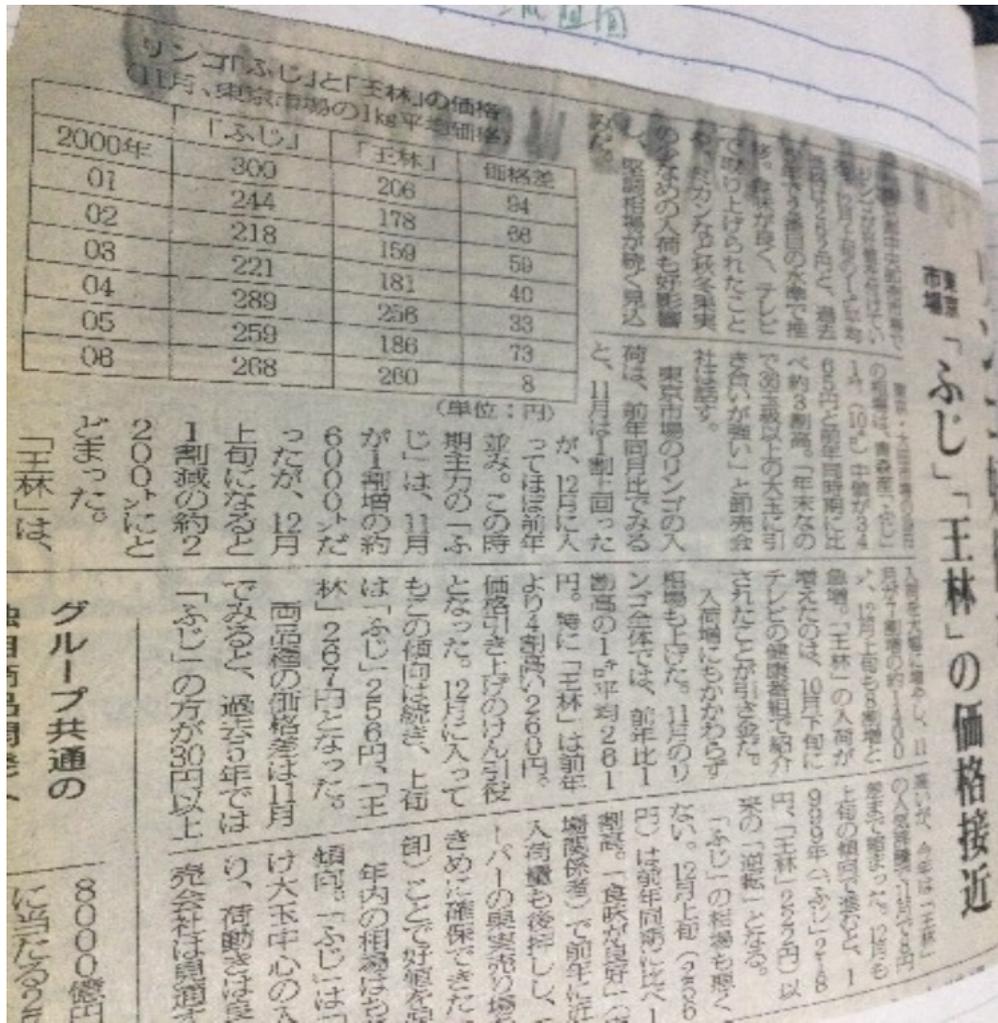
天地成行C：「りんごーのはなーびらーがー、かぜーにちったよなー」
 天地成行B・Cさん、そ

れは美空ひばりさんの名曲「リンゴ追分」ですね。なんですか、見出しは「おい、書け」。あつ、「追分」と「おい、書け」

をかけてるんだー。むりくりー。
 天地成行C：懐かしいことを思い出したので、少

し書いてみたい。以下ちょっとつきあってくれたまへ。
 天地成行A、B：はい。

「師匠さすが！ 若手の歌知ってるんですね。またカラオケつれていってくださいよー」



日本農業新聞で東京都中央卸売市場大田市場の記者クラブで奮闘しているときに、上司のN編集委員から電話が入った。9月か10月のことである。市場も二年目で少し慣れてきた遊軍という立場であった。

「天地君、今年は12月の末に併せてゆっくりリンゴのまとめ記事をかきたまへ。年内にまとめて、生産者さんや市場のみなさんに認めてもらえなければ東日本の方に失礼なのである」

「は、はい(汗) ヲー、がんばってみるよー、やれるだけ」

「おまえはSMAPか！」

(ナレーション)：こんなやりとりをかますほどの余裕はない。秋冬果実の大御所のリンゴ市況についてまとめるとは、大司教さま！ なんとたる幸せとともにうまくかけないとやばいという至境であります()

と思ったように覚えている。かなり手ごわい作物なのだ。その秘密は流通にある。20年前は農協と商系で5割ずつ、という当時ではとてつもなく情報の入手が難しい作物ながら、メーンな作物、といういろんな意味でハードな「相手」であった。

ともあれ、とりあえずリンゴといえば東北、それも青森ということだ、



リンゴの流れを調べていく。まず、9月から「つがる」という品種が始まる。この早生種から次第に中生は赤色ではないものでもはじめ、当時は特に長野県産の「シナノスイート」や、黄色リンゴでは青森の「王林」や岩手産の「きおう」という品種が流行っていた。そして晩生種で横綱の「ふじ」とリレーするわけ。まあ、そのくらいは多くの人が知っているわけである。その流れをとらまえつつ、年末に向かっていく。毎日、市況をみて、入荷量をみて、仲卸棟へと足を運んでいるような関係者と雑談をしいった。

その年、2007年に特に変わったことといえ

ば、テレビの健康情報番組で「黄色リンゴが体にとりわけよいらしい」というテーマで扱われて、「王林」がものすごい人気となっていく。案外、それでリンゴ総体の価値が上がっていったように思えた。市場の人はその異常人気ぶりに少し冷ややかな目線をもつてらしたようにお見受けした。N編集委員はやはり長年の経験できちんと把握されており、「ふじの動向があくまでメインである」というア

ドバイスを崩さなかった。わたしも少し空気にぶられていたのだ。そういう意味で、「王林」の異常人気ぶりをいかに冷静に報道するかに主眼を置き、横綱「ふじ」できちんとまとめる。栽培面積も食味も「ふじ」の売り場が小売りでダントツに大きく、その年のリンゴ農家さんや市場関係者が年を安心して越せるかは、「ふじ」の安定的な売り上げかたにかかっている。そのポイントをはずせないのだ。その数

値をきちんとチェックしきざみつつ、例年にありえない「王林」というアイドル品種の価格も過去10年、「ふじ」と比較して表にして記事にしたためた。



市場の関係者、とりわけリンゴ流通の会長さんから「メディアではじめて、あなたを納会に招待いたします。ともに今年の販売がうまくいったことをよろこびましょう」とうれしい言葉をいただきました。いまでも交流は続きます。



N編集委員からも「『王林』『ふじ』の価格差の表を出稿するというのは良かった。記事もわたしが微修正はしたが、大方合格。ただもう、『王林』の価格がどうのこうのは追わないこと。それはただのミィーハーなものである。このままいけば逆転現象もありうる、との今回の記事の盛り



込みだけで結構だよ」後日、後輩記者を連れ、納会へ赴いた。後輩はカラオケが得意でよかった。

「天地先輩、わたしが場を盛り上げます。なにを歌ったらいいでしようか？」

「元芸能担当としてはだなー、（あたりを見回し）このメンバーで大人数であるから、きかせる演歌……石川さゆりいけるか？」

「『天城越え』ならいけます」

「よしや、かましましよ」

あのころが忘れられない、たのしい記者人生である。

日本農業新聞の益々のご発展をお祈りしております。ここからだと御縁を大切に、天地成行でした。

♪あなたとく越えたい